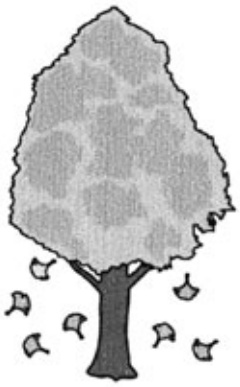
みんなの童話

イチョウの木とほとけさま



大きな、大きなイチョウの木が、古いお寺にありました。

秋も終わりのころ、イチョウの木の下には、黄色い葉が、たくさん散っていました。

お寺には、りっぱなほとけさまが、まつられていました。

ほとけさまは、もう、ずいぶん昔から、ずうっとすわったままでしたので、腰がいたくて、いたくて、こまっていました。

（いちどでいいから、この腰を思いっきりのばしてみたいのう…）

月のきれいな夜でした。

ほとけさまは、少しあいていたとびらから、庭をのぞいて、おどろきました。

（おぉ！、なんという美しいながめじゃ！）

庭いちめんに散ったイチョウの葉が、月のひかりにてらされて、黄金色（おうごんいろ）にかがやいていたのです。

ほとけさまは、どうしても庭に出てみたくなりました。

そこで、かたくなっていた足をのばして、ゆっくり立ちあがり、一歩、一歩、落ち葉をふみしめてイチョウの木の下まで、歩いて行きました。そして、腰に手をあてて、せなかを大きくのばしました。

（あぁ、気持ちがよいのう…）

ほとけさまは、うれしくて、うれしくて、なんども腰をのばしました。そして、はらはらと葉を落としている、イチョウの木を見上げて、声をかけました。

「イチョウの木よ。そなたもわしも、この寺で、わしはすわったまま、そなたは立ったまま、長いこと、ともに過ごしてきたのう…」

イチョウの木は、ほとけさまにはじめて声をかけられたので、とても、おどろきました。

「はい。気がとおくなるほど長く、ここに立っております」

からだに似合わず、小さな声でした。

「たまには、横になってみたいとか、どこか遠くへ行ってみたいとか、思わないかね？」

ほとけさまは、たずねました。

イチョウの木は、しばらく考えていましたが、さっきより少し大きな声で、こたえました。

「ほとけさま、わたしは、ここに立って、時のうつりかわりを見ているだけで、じゅうぶんです」

「ほう、それはまた、よくのないことじゃ…」

「はい。わたしは、とてもしあわせ者です。

これから、冬の寒さに耐えるのは、つらいですが、あっという間に春がきます。

新しい芽が出て、葉がしげり、鳥や虫たちが集まってきます。木の下であそぶ、こどもたちの、にぎやかな声もきこえます。

夏は、夕すずみにくる、おとしよりたちの話の、おもしろいこと、おもしろいこと！

秋になれば、また、今夜のように、葉が黄金色にかがやいて、散っていきます。

そんな日々のくりかえしです。

それでも、わたしは、この日々が、ずっと変わらないで続いてくれることを、こころから願っています」

月のひかりが、やさしくイチョウの木と、ほとけさまをてらしています。

「そうよのう…。そなたの言うとおりじゃ！ わしも、みんなを守っていかねばのう…」

ほとけさまは、深くうなずきました。

「それにしても、このイチョウの落ち葉は、ふかふかのじゅうたんのようで、気持ちがよいのう…。

こよいは、ここで、しばらく横になっていこう！」

ほとけさまは、イチョウの葉でしきつめられた、じゅうたんの上に横になりました。

そして、しずかに目をとじて、つぶやきました。

「これぞ、ごくらく、ごくらく…」

ほとけさまは、とてもしあわせでした。

しろやま会員　いとう　けいこ